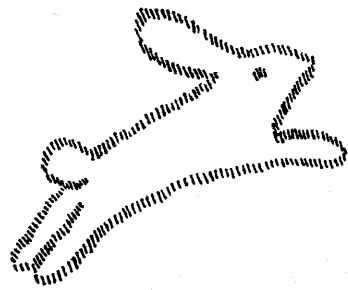


「桜」そして

蕪木寿江



四月の始めに、特殊学級に入學したYちゃんを訪ねて、K市の北部の小学校に行った。一組五人で、五十歳の位の男の先生が、一生懸命に子ども達に話しかけていた。「体操をします。体操着に着替えなさい」先生はさっさとトレパンを着て、鍵を持って縦て型の大きな昔の電蓄の蓋を開けてレコードをかけた。教室いっぱいにはラジオ体操のメロディーが鳴り始めた。けれど誰も動じな

いので、今度は先生が体操服の入った袋をめいめいの所からはずして渡した。しかし一向に着ようとはしないでいると、さっきまで机の下に横になっていた男の子が、一人一人に手伝うというよりも、ボタンをはずして着替えさせていった。「あの子はあれが得意でね、上手なんですよ。しかし、この子の親達は六年間かかってでも脱いだり着たりも教えられないんですよ……」「だから先生

にお世話になってるんです」と、私は言いたかったが黙っていると、「今の親は何をしているんでしょうね。何でも学校に任せるといふのはどういふことなんでしょうね」グルグル回っているレコードを一時とめて又かけた。体操をしているのは先生一人だけで、机の傍から動かない子ども、思ひだしたように手を前に上げる背丈の一番大きな子、私を不思議そうな顔で見ているクラス唯一の女の子、黒板の方に走っていく子……又、着替えさせの名人は机の下に横になってしまった。あんまり長くお邪魔してもいけないと思って、「一週間たったら来ます。」と、約束して帰って来た。

二階の教室へ通ずる外階段も覚えて今度は午後お訪ねすると、先生は園芸のことで、席を外していらっしやうた。(他の先生が、園芸と言われたので、「演芸」かな……と、ふっと思ってすぐ打ち消した) 待っていると、用務員さんが熱い紅茶を持って来て下さった。それが何か特別おいしく感じられた。しばらくすると先生が入っていらっしやう、掲示板に留めてあった日付の入った

子ども達の絵を外して、持って来て説明して下さい。教室の中の拡声器が、「国語の。先生、算数の。先生、組の教室に集合して下さい」と、放送した。「断ってきます。先生と話していた方が勉強になるから」と、冗談を言って立って行かれた。すべて理解していらっしやうとは思いつつも質問されるままに、何と言っても親子関係が大切なこと、安心感の貯えが貯水槽を満たすと、その管を通してどの蛇口をひねっても、『興味・積極性・聞き分け・しつけ・自立・友達遊び・模倣・学習・ことば』などの水が出てくることを学んだ通りに話し、私自身も十名余りの例にふれ、この通り実行してよかったです。矢継早に話した。そして、ティンバーゲン夫妻、田口恒夫訳編の『自閉症文明社会への動物行動学的アプローチ』(新書館発行)の本を紹介した。先生は丹念に書き留めていらした。

見送って下さった校庭には、満開の桜の花びらが遊んでいる子ども達の上に、折からの風によって戯れているように散っていた。歴史を思わせる太い樹が一本と、あ

と五、六本の大きな桜の木があった。校庭を少しずつ増やしてきたのか、塀に添って並んでいる木ではなくて、中央からは離れて自然に実生したと思われるような桜の間隔が一層の風情を添え、走ったり、ボール投げをした、縄とびをしている学童の歓声と花びらがマツチして、日本ならではの豊かなどかな雰囲気をもしていた。

「桜、綺麗ですね——」思わず声をあげると、

「え——、でも今年限りですよ。この運動場は雨が一日降ると十日間も運動会ができないので、全部掘り起して下水工事をするには桜が邪魔だし、桜を移動すると費用が三倍もかかると言われるのです。」

「わあ、勿体ない。」

「そうなんですよ。勿体ないんですよ。みんな体制に流されて行ってしまっただけなんですよ。」

「運動会はまた晴れた日を選べばいいし……あの桜だったら二十一世紀にも咲いているのに——」自分の感情をこらえて小声で言うと、

「二十一世紀があるんですか？」と、大きな声が返ってきた。二回お目にかかったところでは私より葺下の先生かとお見受けするのに、「疲れますね」とか、「大変ですよ」とか、(とても熱心で温かい先生だと後で聞きましたが)一見、年寄り染みたことを言われていた先生が、「えっ、二十一世紀があるんですか」と私を見た眼は、ランランとはなくて、ガンガンと怒りに燃えているように思えた。「そう信じたいんです。」私はやっとこれだけのことを言っただけだ。バス停までの小径を、校庭の桜を何度も何度も振り返りながら、歩いて行った。胸が締めつけられるような思いで、なかなか来ないバスを車の烈しい埃の中で待っていた。現代は「思想を持つのが怖い時代」と、ある学者が言った言葉がからまわりをし響いた。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)